

諏訪内晶子が芸術監督を務める「国際音楽祭 NIPPON 2026」。
盟友、サッシャ・ゲッツェルは、前回の2024年に続いてフェスティヴァル・オーケストラを指揮し、
ハイドンの交響曲第39番と、モーツァルトの交響曲第40番の二つのト短調交響曲を演奏する。
モーツァルトの40番を中心に、「調」の綾なす名曲の世界を語ってもらった。



Sascha Goetzl

ウィーン生まれ。ヴァイオリニストとしての教育を受けつつ、指揮をリチャード・エスターライヒャーとヨルマ・パヌラに師事。その後、米国にて小澤征爾、ムーティ、プレヴィン、メータ、ハイティンクの薫陶を受ける。フランス国立ロワール管弦楽団音楽監督、クラコフ・フィル首席客演指揮者。ウィーン国立歌劇場に客演し、この12月には都響の第九公演を指揮した。

国際音楽祭 NIPPON の2月演奏会で指揮

聞き手 藤盛一朗 ◎本誌編集

サッシャ・ゲッツェルの語る、 モーツァルト 40 番

「ト短調は運命と死を表す」

くフォルテの和音は、叫びです。自分との闘い。時間との闘い。いっぱい、いっぱいになり、エモーショナルな限度に達しているのです。

——この交響曲は、39番の変ホ長調、41番のハ長調と同時期に作曲されたと言われます。なぜ、この曲だけが悲劇的なのでしょうか？

そのことには私も関心を抱いてきました。まずは41番のハ長調ですが、この調は無限のシンボルです。ハ長調は、すべての調の真ん中に位置するからです。

モーツァルトの天才性は、瞬間のひらめきにあります。《ドン・ジョヴァンニ》序曲は、公演の初日の前夜に徹夜をして作曲されたくらいです。アーノンクールは、この3曲でモーツァルトは自分のレクイエム作品を作ろうとしたのだと考えました。

——では、39番の変ホ長調は何を意味するのでしょうか？

モーツァルトの場合、調は大変シンボリックです。《魔笛》はフリーメイソン（秘密結社）と結びついていることが明らかですが、タミーノが試練を受ける。その場面が表すフリーメイソンの見習いはフア、徒弟はシリ、そして（高位の）マイスターが変ホ長調です。《コジ・ファン・トゥッテ》ではフィオルディリージの決意や純粋な心を表すアリアが変ホ長調です。

——40番に戻ります。第2楽章は、どのような音楽でしょうか？

八分の六拍子は民俗的で、メロディーは単純。パストラーレです。ところがモーツァルトが何をするかというと、半音階の下行音型を示す。落ちていくのです。これは死に向かう悲劇性を表しています。《魔笛》で、パミーナが思い余って自らの命を絶とうかとするところ。音は10音も下がります。

モーツァルトは、自害を企てることはありませんでした。ただ、人生には不透明感が増していた。第2楽章



上 交響曲第40番第2楽章に現れる下行音型を紙を使って説明するゲッツェル



公演情報

サッシャ・ゲッツェル指揮
国際音楽祭 NIPPON フェスティヴァル・オーケストラ
諏訪内晶子（ヴァイオリン）

2月11日（水祝）17:00 横浜みなとみらいホール 大ホール

- ハイドン：交響曲第39番 ト短調 Hob.I:39
- ハイドン：ヴァイオリン協奏曲第3番「メルク協奏曲」イ長調 Hob.VIIa:3（ヴァイオリン：諏訪内晶子）
- アルヴォ・ペルト：フラトレス（ヴァイオリン：諏訪内晶子）
- モーツァルト：交響曲第40番 ト短調 K.550

☎ジャパン・アーツびあ 0570-00-1212

——演奏会のテーマは、ト短調だと感じられます。

ハイドンは、交響曲第39番で新しい「言語」を見出そうとしました。不協和音という相反するものが作り出す緊張の瞬間。ハイドンは、音が解

の下行音型は、その不透明感が乱暴な形で表れていると思います。

逆にパストラーレは何かといえば、母や姉に抱きしめてもらいたいという願望かもしれません。

——次の第3楽章は？

メヌエットは、アクセントがついて変拍子のように聴こえます。ハイドンの時代は、メヌエットは実際に踊るための曲でした。モーツァルトのこのメヌエットは踊れない。踊れないメヌエットという革命を起こしたのです。

——終楽章は、悲劇的です。

決しないことに挑戦しようとした。曲の始まりからして、不協和であり、聴く者は何が始まったかと思う。そして、全休止です。ただならぬ緊張が生まれます。

ト短調のアイデンティティは、運命と死。モーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》の調、二短調も同じです。

——モーツァルトの交響曲第40番は、名曲です。ですが、実演ではなかなか名演に接することが少ないと話題になることがあります。ゲッツェルさんは、ウィーンに根差した音楽家ですが、この曲の演奏には何が必要でしょうか？

まず基本としてあるのは、楽譜を理解することです。モチーフをとらえ、歌いまわしや音色に配慮する。どの曲をとっても、それが基本です。40番に限らない話ですが、ある時の演奏で始めて2分でミスが起きた。奏者にはアドレナリンが生じ、結果として素晴らしいものとなるということがあれば、完璧に進んで逆に、演奏が凡庸になることもあります。それが演奏の難しさです。

この40番は、モーツァルトの（死の3年前という）後期の作品です。17歳の時の作品のように演奏してはいけません。その間に、モーツァルトの人生にはさまざまなことがあったのです。演奏にはその知識が必要です。

40番の冒頭は、何かから逃亡しようとしているかのようです。自分自身や人生にショックを受けている。続

無調になる部分があります。新ウィーン楽派のような20世紀を指さしている。考えられないアイデアです。フガーートになると、もつと、もつと対立（不協和音）をとっていくかのよう。するといきなり休符になる。最大限の音楽的緊張が生まれます。するとレブリゼ。18世紀に戻りました、とばかりに主題が回帰します。こうした展開が想像できないくらい素晴らしいのです。

——終結の激しさをどう考えますか？

やはりト短調ですが、運命を表していると思います。そして解決しないままに終わってしまいます。オーブ・ン・エンドです。

——諏訪内さんとは、ジュリアード音楽院の学生時代からのつながりでしょうか？

晶子は純粋な音楽家です。楽譜を尊重し、聴衆にどう伝えるかを謙虚な気持ちで考えます。2024年にモーツァルトの協奏曲で共演した時には、フレージングや装飾音についてずいぶん話し合いました。あれだけのキャリアを積んでいながら、表現を誠実に探究し続けているのです。

この演奏会では、スピリチュアル（精神的）なものが生まれると思います。晶子がソロを弾くペルトの《フラトレス》は、ペルトが世間から隔絶し、67年にわたる精神の鍛錬を経て初めて作曲した作品です。